

我が国周辺漁業資源調査

山川 卓・山田浩且・石川貴朗・久野正博

目 的

我が国周辺における重要漁業資源の資源量評価、動向の予測、最適管理手法の検討を行うのに必要な基礎資料を整備するため、水産庁の「我が国周辺漁業資源調査委託事業実施要領」に基づき調査を実施する。

なお、各漁業資源の資源量評価、動向予測等については、水産庁水産研究所によってとりまとめられるため、ここでは本県が委託を受けている6魚種（マイワシ・カタクチイワシ・サバ類・マアジ・ブリ類・スルメイカ）の本県沿岸域における本年度の漁況特性についてとりまとめる。

方 法

1. 漁場別漁獲状況調査

県下の中型まき網13ヶ統、沖合底曳網1ヶ統から漁獲成績報告書（月報）を徴収し、漁場別漁獲動向を把握した。

2. 水揚げ調査

県下主要水揚げ港（白子・河芸・安乗・波切・片田・和具・贄浦・奈屋浦・神前浦・錦・紀伊長島・九木の12港）において、日別、漁業種類別、魚種別漁獲量を調べた。

3. 生物測定調査

県下主要港に水揚げされたマイワシ、カタクチイワシ、サバ類、マアジについて魚体測定を行い、漁獲物の生物特性を把握した。

4. 卵稚仔分布調査

毎月1回、伊勢湾および熊野灘の所定の定点（計12定点）において改良型ノルパックネットの鉛直曳きを行い、調査対象種の卵稚仔出現動向を把握した。

結 果

調査結果に基づく調査対象魚種の本年度の漁況特性は以下のとおりである。なお、ブリの漁況については、イナダ、ワラサ、ブリは本事業報告の新漁業管理制度推進情報提供事業Ⅲ（定置網漁獲統計調査）の項で、モジャコは平成10年度漁海況予報関係事業結果報告書でそれぞ

れ詳細に報告されているのでここでは省略する。

1. マイワシ

（熊野灘）

熊野灘主要5港（奈屋浦・贄浦・神前浦・錦・紀伊長島）における1998年度（平成10年度）の中型まき網による漁獲量は1,490トンで、きわめて低調となった前年度（3,221トン）をも下回る近年最低の水準となった（図1）。主要5港で漁獲量のモニタリングを始めた1992年度（20,387トン）のわずか7%の水準にまで落ち込んだ。マイワシ高資源水準時の熊野灘沿岸では春季、特に3～6月に産卵後の索餌北上群（大羽群、体長20cm前後）が大量に来遊し、年間漁獲量の60～80%を占める一大盛漁期を形成した。しかし、この群の来遊も1992年頃を境に急減し、近年では逆に年間でも最も漁獲量の少ない時期へと変化している。今春季も4月にサバ等に若干混獲（体長15～16cm、1997年級群）された程度であった。5月に入り、沿岸の定置網で当歳魚（1998年級群、体長7cm前後）が混獲され始めたが、漁獲量は前年同様きわめて少なかった。熊野灘北部の波切港における定置網（4ヶ統）の4～6月の漁獲量は約12トンで、低調で推移したほぼ前年同期並（約15トン）、1996年同期（約40トン）の約30%の水準にとどまった。熊野灘中部の定置網でもほぼ類似した漁況で推移した。熊野灘沿岸への来遊状況を見る限り、1998年級群も1997年級群並に低い資源豊度にあると考えられた。1995年以来、夏季（7～9月）に当歳魚が比較的まとまって漁獲されるようになったが、今夏季はこうした資源状態を反映し、主要5港の漁獲量も192トンときわめて低い水準にとどまった。例年より遅い10月上旬に、当歳魚がややまとまって漁獲されたものの、長く持続はしなかった。

1992年以降顕著となった11月後半～12月にかけての大羽親魚群（通称御前埼沖親魚群、年末に静岡県沖から来遊し、足早に潮岬以西へ通過する産卵群）の来遊は、今期にあってはほとんどみられなかった。前年11月末には本県所属の大中型まき網が静岡県沖で本群を550トン漁獲した。しかし、今期の漁獲はほとんどなかった。本群の出現は今期ではほぼ途絶えたと言えよう。

1月に入り、ここ数年同様大羽群（体長19～21cm）の来遊がみられたが、その水準はきわめて低く、マアジ等にわずかに混獲された程度であった。1月下旬～2月にかけて、豊漁となったカタクチイワシに混じり、体長12～13cmの小羽が比較的まとまって漁獲された。期間中、漁場は主に熊野灘南部沿岸に形成された。熊野灘沿岸における漁獲物体長組成の推移から判断して、この群（2月で体長12～13cm）は1998年秋発生の早期発生群ではないかと推定された。

マイワシ資源の衰退とともに、熊野灘沿岸のマイワシ漁況を支えてきた3つの群、すなわち①夏季に来遊する当歳魚、②11～12月に来遊する親魚群（通称御前埼沖群）、③1～2月に潮岬以西から来遊する群、の来遊量は、いずれも前年度の水準を下回り、近年最低の漁況となるに至った。

（伊勢湾）

伊勢湾内のバッチ網漁は7月21日に解禁した。伊勢湾主要2港（白子・河芸）における1998年漁期の漁獲量はわずか2トンで（図2）、前年同様きわめて低い水準にとどまった。漁獲があったのは11月29～30日の2日のみであった。この際に漁獲されたのは体長16～17cmの当歳魚であった。低水準ではあるが11月末にマイワシが漁獲されたのは近年では珍しい現象である。今秋季の伊勢湾内の水温はかなり高めで推移しており、マイワシの来遊もこのことに起因した可能性が高い。

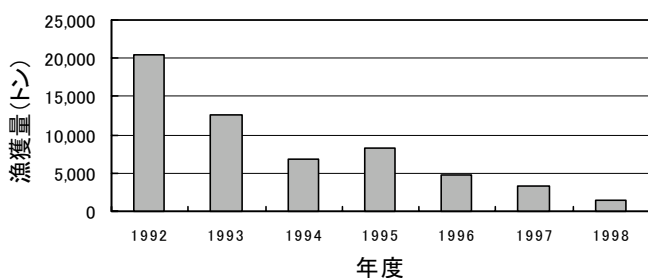


図1 熊野灘主要5港マイワシ漁獲量 (中型まき網)

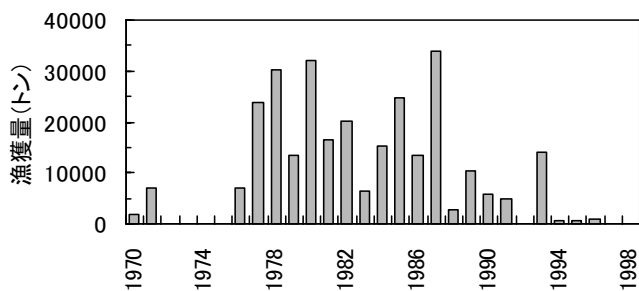


図2 伊勢湾主要2港マイワシ漁獲量

2. カタクチイワシ

（熊野灘）

熊野灘主要5港（奈屋浦・贄浦・神前浦・錦・紀伊長島）における1998年度（平成10年度）の中型まき網による漁獲量は3,791トンで、比較的好漁で推移した前年度（1,008トン）の約4倍、主要5港で漁獲量のモニタリングを始めた1992年以降では最高水準となり（図3）、本県中型まき網の漁獲対象としてはサバ類に次ぐ資源となった。漁獲の大半は1999年1～2月に集中した。1月中旬以降、体長11～12cmの成魚大型群を漁獲主体に好漁が続いた。特に2月には主要5港で2,000トンを越える豊漁となった。3月に入り漁況は一変し、漁獲量は急減した。この間、漁場は主に熊野灘南部に形成された。同様の豊漁現象は三重県以西の太平洋岸一帯で認められた。宮崎水試の情報によれば、来遊時期、漁獲物組成とも熊野灘沿岸での状況とほぼ一致しており、かなり広域的に認められた現象であった。

（伊勢湾）

伊勢湾内のバッチ網漁は7月21日に解禁し、年末まで漁が続いた。伊勢湾主要2港（白子・河芸港）における1998年漁期の漁獲量は7,400トンで、近年でも好漁であった前年度（6,222トン）を上回る好調な漁況で経過した（図4）。解禁当初（7月）は体長11～12cmの成魚大型群主体に好漁となった。しかし、この群の漁獲は長続きせず、8月中旬頃を最後にほとんど漁獲されなくなった。これに代わり8月下旬以降は体長8～10cmの成魚小型群が漁獲対象となったが、その漁獲は低水準にとどまった。10月に入ると漁況は好転し、体長9～10cmの成魚小型群がまとまって漁獲されるようになった。その後年末まで安定した漁況が続いた。11月中旬以降は7～8cmの小型群も混獲されるようになった。

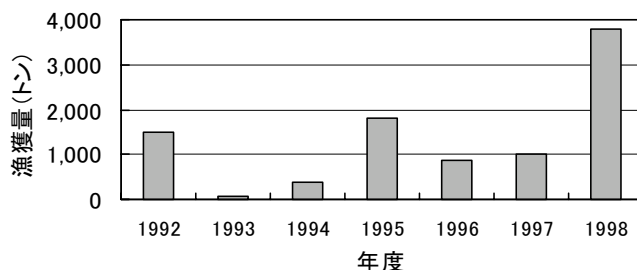


図3 熊野灘主要5港カタクチイワシ漁獲量 (中型まき網)

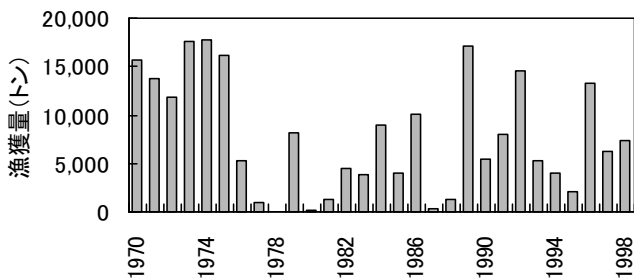


図4 伊勢湾主要2港カタクチイワシ漁獲量

3. サバ類

熊野灘主要5港（奈屋浦、贄浦、神前浦、錦、紀伊長島）における1998年度（平成10年度）の中型まき網によるサバ類の漁獲量は3,941トンで、昨年度の17,263トン、一昨年度の19,304トンを大きく下回り、ここ6年間では最低の水準となった（図5）。昨年と一昨年の豊漁を支えたゴマサバ1996年級群は1998年6月前半までは漁獲が持続したが、6月後半以降はほとんど漁獲されなくなった。これに代わって漁獲の主体を成したのは1997年級群であるが、漁獲量はここ数年のうちで最低の水準であった。1998年級群の加入も多くはなかった。

マサバは4月と5月に比較的にまとまった漁獲があったが、それ以外の期間の漁獲は低調で、年度中のサバ類全体に占める漁獲割合は23.4%（奈屋浦市場）にすぎなかった。

ゴマサバおよびマサバの月別尾叉長組成データの解析結果によると、両種とも成長は年級群によって大きく異なり、卓越年級群であった1996年級群の成長は他の年に比べて相当遅れていた（12月末日時点でのゴマサバの平均尾叉長24.6cm）。逆に1998年級群の尾叉長は12月末日時点で平均32.1cm（ゴマサバ）と推定され、他の年よりも成長が速かった。両種の成長が密度依存的であるとすると、1998年級群の資源量は他の年級群よりも低水準であることが示唆される。

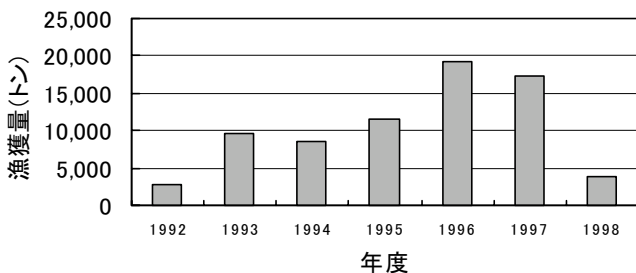


図5 熊野灘主要5港サバ類漁獲量（中型まき網）

4. マアジ

1998年度における熊野灘主要5港（奈屋浦・贄浦・神前浦・錦・紀伊長島）の中型まき網によるマアジの漁獲量は3,253トンで、近年で最も豊漁であった昨年度の4,161トンに次ぐ好漁となった（図6）。なかでも9～11月の秋季にまとまった漁獲（9月:650トン、10月:619トン、11月:702トン）がみられた。

漁獲の主体は1997年級群（尾叉長 7月19～21cm, 9月20～23cm, 11月 21～24cm）、および1998年級群（尾叉長 8月13～15cm, 9月14～17cm, 11月 16～19cm）で、月によっては1996年級群が若干混じっていた。1999年1月以降は尾叉長20cm前後の1998年級群が主体となった。

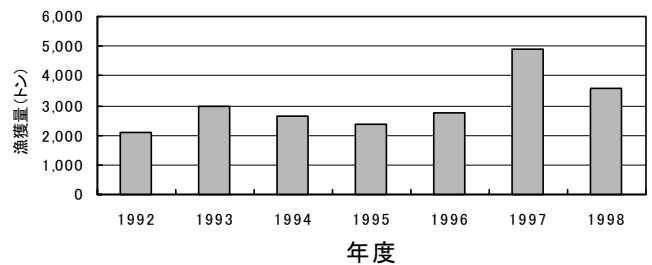


図6 熊野灘主要5港マアジ漁獲量（中型まき網）

5. スルメイカ

和具港（県下最大のスルメイカ水揚げ港）における1998年5～9月までの一本釣りによる総漁獲量は131トンで、低調であった前年同期（146トン）をも下回る近年最低の水準となった（図7）。例年、盛漁期となる6月にほとんど漁獲がなく、近年でも著しく低調な漁況で経過した。1998年5月末には黒潮が紀伊水道沖～潮岬沖で大きく蛇行し、蛇行の北上部が熊野灘沿岸に直接流入した。この影響で6月には表層～200m層できわめて高い水温を示した（50m層で3～6℃高め、100m層で1～4℃高め）。こうした高温現象が6月の不漁の主因であった可能性が高い。この高温現象も7月には解消され、8月にはやや低めの傾向に転じた。これを機に漁況は好転し、1日1隻あたりの漁獲量も170kg前後にまで回復した。8～9月においても前年、前々年並の漁獲があった。しかし、6月の不振の影響が大きく、期間全体の漁獲量はさほど伸びなかった。なお、漁獲物はほぼ前年同様、銘柄大（外套長21cm以上）が主体であった。

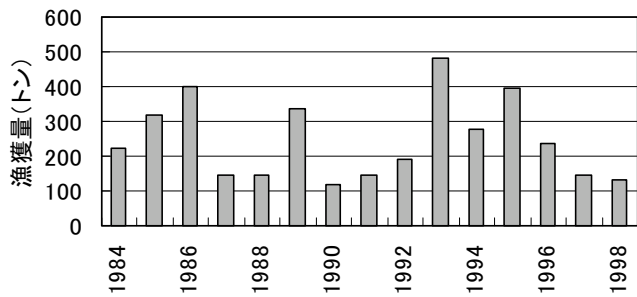


図7 和具港におけるスルメイカ漁獲量
(一本釣り, 夏イカ漁(5~9月計))

関連報文

- ・長期漁海況予報(中央ブロック) No.106-108, 中央水産研究所
- ・平成10年度漁海況予報関係事業結果報告書(漁海況データ集), 三重県水産技術センター